

マンボラマTokyo presents 新宿ラテン地獄1 ～サルサ定番～

~play list~

- 1 El Malo / WILLIE COLON
- 2 Abran Paso / LARRY HARLOW feat.ISMAEL MIRANDA
- 3 Anacaona / FANIA ALL STARS
- 4 Quimbara / CELIA CRUZ & JOHNNY PACHECO
- 5 Quitate La Mascara / RAY BARRETTO
- 6 Nada De Ti / EDDIE PALMIERI
- 7 Todos Vuelven / RUBEN BLADES
- 8 Soy Boricua / BOBBY VALENTIN
- 9 Bohemio / LUIS PERICO ORTIZ
- 10 La HIja de Lola / CHARLIE PALMIERI
- 11 Las Caras Lindas / ISMAEL RIVERA

マンボラマTokyo presents 新宿ラテン地獄1 ～サルサ定番～



1. El Malo

ウィリー・コローン Willie Colon

エクトル・ラボアー Hector Vavoe

サルサをNYラテンのロック化と定義したならば、その具現化といえるスター像／アイコン。ある種、パフォーマンスの深化において世界有数の様相を呈したマンボの黎明期が1948年ころに始まったとすれば、その約20年後に演奏の下手な部分も含めてカッコイイと思えるパラダイム・シフトがブーガルーで起こり始めたといえる。その時代のバンド全てを見渡して、ウィリー～エクトルのオーラがNo.1。

初期にはブーガルーを中心としていたが、徐々にサンバなどラテン・アメリカ諸国のリズムをミックスするような作風で70年代中期に至った。ルベーン・ブレイズの台頭と歩調を合わせるかのように、両者は袂を分かつことになるが、70年代末～80年代初頭のコラボ最終章は、独特のアーバン・ラテンのエleganceあふれるヒット・アルバムを残した。



Willie Colón And Ruben Blades | Siembra (1978)

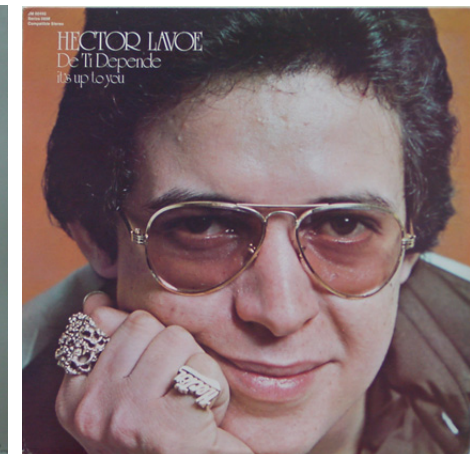
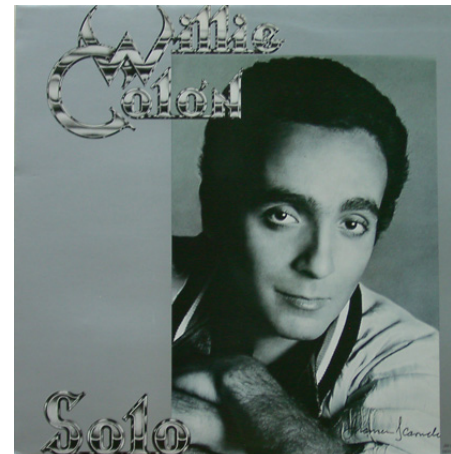
Label / Genre: Fania / Latin
Producers: Willie Colón
Art Direction: Irene Perlicz
Nationality: USA
Running Time: 42:18

この素晴らしいリリクスは、サルサの巨匠Willie Colón (ニューヨークのトリニダド生まれのジャズ・トリオ)とパナマのシンガーソングライター兼俳優のRuben Bladesのコラボレーションの結晶だ。サルサの創始者Colónと、Hector Lavoe/Willie Colónのライヴ・セッションは歴史的な出来事だった。Bladesは社会的良心に基づく音楽制作を学んだ。ラテン・アメリカの音楽の心はそこに光を投げることから、テーマは広く変動している。しかしアルバムにはホームシックに陥る移民の魂を漂わせる高揚感もある。影響あるメロセージングも含まれている。真実のラテン・アメリカのサウンドを創った (Photo: Photo Navaj) [Mark The Kudu]はその副産物であり、ストリーミング時代の初期とマンボが結び付き、最新の録音技術とある。Bladesは録音するたびに、誰かそして彼が誰かに感情を込めて歌っている。即興的なアドリブで詞を作るアーティストの中でも、彼は高い地位を築いている。Colónは、ニューヨークで最も影響力のあるバンドの演奏らしいミュージシャンを見た。中でも特に親しいコーラスグループは、スペイン語圏を模倣してこのアルバムのために録音された。1970年代初期 (Siembra (w/ Ruben Blades))は学生世代から愛顧として受け取られていた。彼はその中にラテン・アメリカの魂の明確なメッセージとインスピレーションを見出す。それは、単純なためた歌い出しで内蔵された中絶的なラテン・アメリカの多くの曲への正統的なサウンドトラックにもなる。強いメロニーは第一級の演奏によって完成している。これはサルサの歴史の重要な瞬間であったが、それは録音された。JCV

Track Listing	Duration
01. Plastico (Single)	3:23
02. Bucanón Guayana (Single)	3:23
03. Pedro Murga (Single)	3:23
04. Nueva Generación (Single)	3:23
05. Que (Single)	3:23
06. Ome (Single)	3:23
07. Siembra (Single)	3:23

414/415 The Seventies

←ローリング・ストーン誌創設者が監修したガイド本、『ダンス・マニア』『ケニア』と並び、ウィリー(w/ルベーン)の『シエンブラ』が掲載された。だが…。



Siembra at "1001" albums

マンボラマTokyo presents 新宿ラテン地獄1 ～サルサ定番～



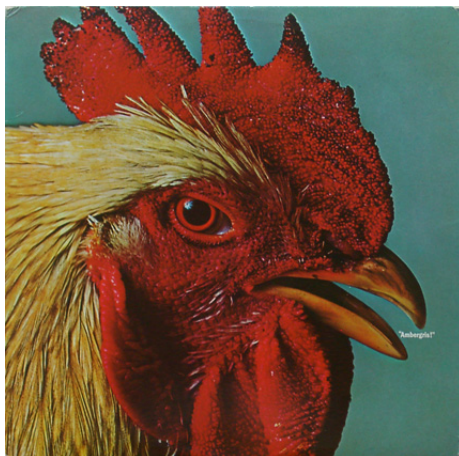
2. Abran Paso!

ラリー・ハーロウ Larry Harlow

イスマエル・ミランダ Ismael Miranda

ウィリー・コローン、ラリー・ハーロウなどファニア(≒サウンズ・オヴ・ヤング・アメリカ・ラティーノ)路線を決定付けた若手バンド・リーダーの音楽的経験はヒト世代上のジョニー・パチーコやレイ・バレットと異なり、先輩オーケストラで修行しました…そういう下積みがなく、いきなり仲間たちと一緒にプロ化した点にある。ウィリーが創作ラテンとすれば、ラリーは新伝承派ラテン。ティピカリストとしての伝統の継承ではあるが、ケレン味のない演奏ぶりや尖ったヴォイスिंगに新世代のNYラテンの息吹を感じる。

ラリー・バンドの歌手としては、最初期にフェロ・ブリート、モンギート、ヴィッキーらがレコーディングしたが、すぐにイスマエルとの名コンビが人気を博した。その後も、ネストル・サンチェス、ジュニア(フニオル)。ゴンサーレスらとも一定の期間をコラボした。



←

オーケストラ。
ハーロウとしても『ミー・アンド・マイ・モンキー』『オミー』など同時代ロックへの接近を試みたが、ルイ・カーンとはロック・バンド:アンバーgrisでも活動した。



マンボラマTokyo presents 新宿ラテン地獄1 ～サルサ定番～



3. Anacaona

ファニア・オール・スターズ Fania All Stars

チェオ・フェリシアーノ Cheo Feliciano

(非メジャー)レーベルが専属ミュージシャンの豪華なラインナップを誇示し、プロモーションを展開することがしばしばあり、アレグレやティコ、セスタなどラテン系レーベルもアルバム製作やライブを行った。1960年代前～中期はデスカルガを魅せるあり方としてのオール・スターズであったとも言える。ファニア・オール・スターズの最初のアルバムもライブ盤『アット・レッド・ガーター』で、このときは確かにデスカルガ様のパフォーマンスだったが、僅か数年を経た『アット・チーター』では歌手へのスポットの当て方が変わった。その典型例が「アナカオーナ」。

ジョー・クーバ・セクステットの歌手だったチェオは、このライブの時点でスターの一人であり、ドキュメンタリ映画『アワ・ラテン・シング』ではイスマエルにコロの指導をしている。

←「アナカオーナ」はVol. 2に収録

↓FASの4タイトルをまとめた優れモノDVDボックス

『チーター』の後に、ジョー・クーバ風ソロ作↓で「アナカオーナ」を再収録



Cheo

Copyright: マンボラマTokyo



マンボラマTokyo presents 新宿ラテン地獄1 ~サルサ定番~



セリア・クルース Celia Cruz

ジョニー・パチエーコ Johnny Pacheco

1950年代に、ラ・ソノーラ・マタンセーラの
スター歌手としてラテン・アメリカ諸国で活躍
したセリアと、1950年代後半にパーカッショ
ニストとしてNYで活動を始めたジョニー、
キューバとドミニカ共和国からの移住者同
士、スター同士のコラボというNYサルサの
可能性と多様性を示しつつ、そのタイトな演
奏でサルサの金字塔としての名声を得た。

1970年代当時から日本盤がリリース(ただ
し、"Cluz"と誤記)された永遠の名盤。セリア
は競演盤多数だが、これに勝るものなし。



↑かつての盟友チャーリー・パ
ルミエーリが主導するアレグレ
オール・スターズへの対抗？

4. Quimbara

ソノーラ時代はキューバ産ポップの宝庫。ボンバからCD3枚で発売
された。60年代はTPスタイルの重厚アグレッシヴ、70年代はシャ
ープなコンフト、いずれもラ・ワラチェーラの名にふさわしい疾走感。

アレグレ期はフルートを持ち、ブームを牽引するチャランガ。ファニア
を立ち上げてからはコンフトへ切り替えた。アルセニオ、カシーノ、
マタンセーラ、あまたの名流コンフトとも異なるタイトなビート感。



Con La Sonora Matancera



Included "Bemba Colora" Woodenflute



Copyright: マンボラマTokyo



Included "Ponle Punto"

マンボラマTokyo presents 新宿ラテン地獄1 ～サルサ定番～



5. Quitate La Mascara

レイ・バレット Ray Barretto

兵役中に音楽活動を決心し、1950年代中～後半のファンキー・ジャズ・シーンと、ホセー・クルベーロ～ティト・プエンテでラテン・パーカッションを習得し、1960年代にはバンド・リーダーとしての活動を開始した。初期はチャランガ、ときにホーンズを加えていたが、ファニア移籍とともにソノラ編成のコンフトに転換、ハード・ハンズと称されるのはコンガのプレイのみならず、タメの利いたクロいビート感をもつアンサンブルゆえ。ファニア・オール・スターズのチーター公演には、多数のバンド・メンバーが参加しており、1970年代初頭サルサのパワフルな牽引者だった。

ティピカ73やワラレーの分裂脱退は有名だが、即座に有能な新人タレントが結集し、バンドとしてまとまるのはレイのリーダーシップに他ならない。後にルベーン・ブレイズのバック・バンドとして活動することになるセイス・デル・ソラールやリッキー・ゴンサーレス、アンヘル・フェルナンデスらが起用された70年代末～80年代前半もハード・ハンズなサウンドを誇った。



マンボラマTokyo presents 新宿ラテン地獄1 ～サルサ定番～



6. Nada de Ti

エディ・パルミエーリ Eddie Palmieri

ザ・サン・オヴ・ラテン・ミュージック。この太陽は陽気ではなくて、むしろ月のような狂気をはらんだ抜き差しならないオーラを放つ。パチエーコやバレートと世代的に近いが、マンボのアグレッシヴでダンスブルなアンサンブルを、1960年代のジャズのヴォインシング／モサンビーケのリズム・アンサンブルでアップ・トゥ・デートしたコンフント：トロンバンガで1960年代初頭に後のサルサの姿を具現化した。

ブーガルー期直前に、ティコ・オール・スターズでのライブやカル・ジェイダーとのコラボを経て、トロンバンガをコンフント化していった。その過渡期『フスティシア』、アンサンブルの充実とオーバー・ダブを多用したアルバム製作の原型となった『スーパーインポジション』、兄チャーリーのオルガンを加えた完成形『バモノス・パル・モンテ』。これらをティコ3部作という。

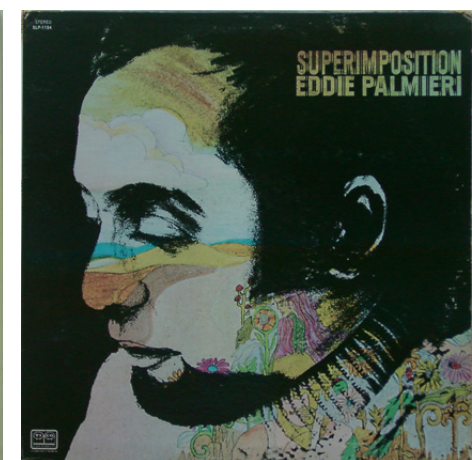
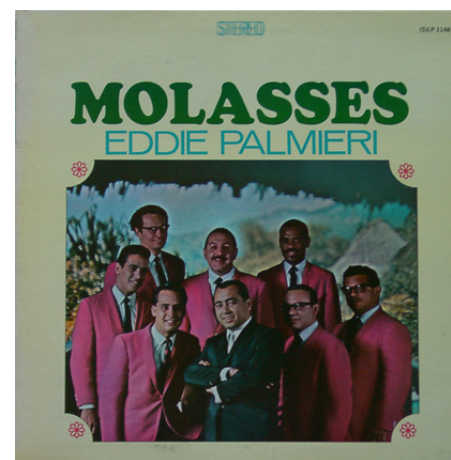
歌手はイスマエル・キンターナではなくラロ・ロドリゲス。



Tito Rodriguez at the Palladium



Young Eddie



マンボラマTokyo presents 新宿ラテン地獄1 ～サルサ定番～



7. Todos Vuelven

ルベーン・ブレイズ Ruben Blades

パナマー出身のシンガー・ソングライター。1976年ころにはNYへ進出し、半プロノ半アマのような状況でシンガーとして、作曲家として音楽家活動を展開した。ティト・アジェンの後ガマとしてスムーズなヴォーカルが脚光を浴び、エクトル・ラボーへ提供した「エル・カンタンテ」の大ヒットにより作曲家としても大注目される中、ウィリー・コローンとのコラボを経てシンガー・ソングライターとしての自身の立脚を決断した。そのランド・マークが『ブスカンド・アメリカ』:アメリカ(USAでなはないよ)を探して。

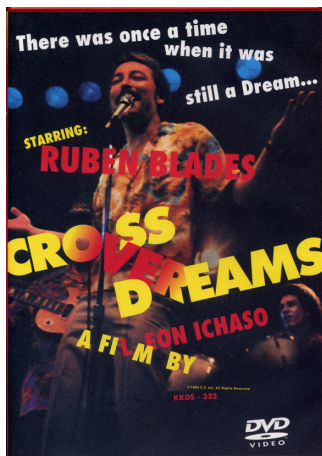
※ウィリー・コローン項を参照

作詞面では、「プラスチック」を代表例として、いわゆる社会性、メッセージ性を込めているが、それ以前のヒット曲がノンポリ恋愛モノだけだったわけでもないわけで、メロディ・ラインとか構成の巧みさを含めて共感を得る唄作りに長けているといえる。

『クロスオーバー・ドリームズ』では、まさに下積み時代のルベーンを連想させる街の歌手が、千載一遇のチャンスを得たとき、恋人や仲間、なによりも自分の音楽観との決別を選択し、ふと気づいたときに帰ることができる、受け止めてくれる者の存在の大切さをかみ締める物語。「トードス・ブエルベン」は、そのキーとなる印象的なナンバー。

サントラの音楽ディレクターは、パナマー出身、ルベーンに先駆けてNYで活躍したフルート奏者マウリシオ・スミス。DVD発売中。

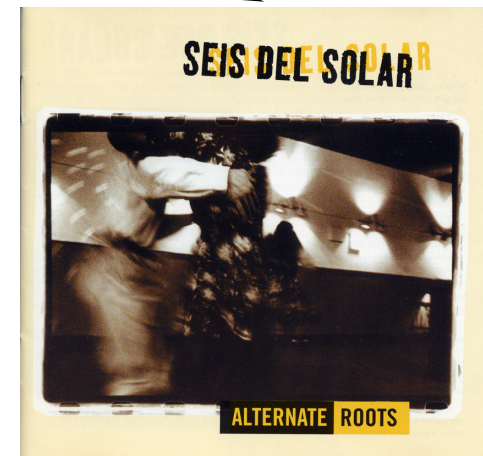
オスカル・エルナンデス、ラルフ・イリサーリら80年前後のバレート楽団を支えたメンバーを中心としたバック・バンド。ディラン〜ザ・バンドみたい？



Cross over deams



Copyright: マンボラマTokyo



マンボラマTokyo presents 新宿ラテン地獄1 ~サルサ定番~



8. Soy Boricua

ボビー・バレンティン Bobby Valentin

ホーン奏者からベースへ転向、NYで成功した後に、いち早くプエルト・リコへ活動の拠点を移し、自己のレーベル:ブロンコを設立、今も新作を出し続ける現役ミュージシャンの雄。

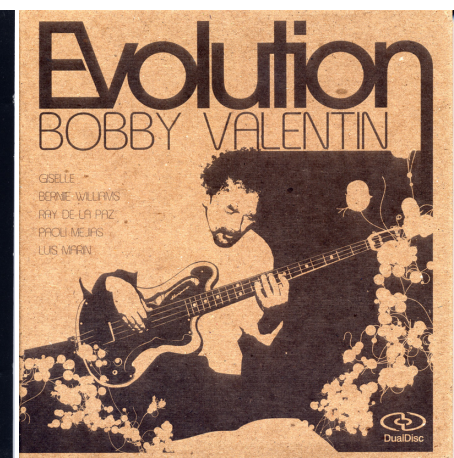
いわゆる下積み経験も豊富で、ファニアへ移籍にてバンド・リーダーとしての名声を得た。1970年代後半以降のアルバム群は、いわゆるクロっぽいノリが特徴だが、レイ・バレットのようなビート感ではなく、クインシー・ジョーンズがプロデュースするポップ・ソウルの都会感に思うが…。ファニア・オール・スターズの影のディレクターともいえそう(状況証拠ある?)だし、1993年の大名盤『エスター・シーバ』のユニット:デスカルガ・ボリクアの音楽性もボビーのものといえそうだ。

最新作『エヴォリューション』は、久しぶりのフル録音で、あのクロっぽさと、激烈なコロを交えたハードコアなサルサ好盤。紅一点のジセーレをフィーチャーした「シ・シ、ノ・ノ」はもちろんマチート楽団の定番だが、これをカヴァー。PVでは大御所オーラが漂っている。

トランペットを持っていたのは有名だけど、トロンボーンもイケます。



In Puerto Azur, Venezuela



マンボラマTokyo presents 新宿ラテン地獄1 ~サルサ定番~



ルイス・ペリーコ・オルティス Luis Perico Ortiz

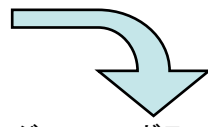
プエルトリコでトランペットの神童としてオール・ジャンルで音楽活動を開始し、1970年にNYに進出、モンゴ・サンタマリーアやティト・プエンテらのバンドでトランペッター／アレンジャーとしてメキメキ頭角を現す。78年に自己のオーケストラを立ち上げ、今もって活躍するミュージシャン。

『サブローソ』は自己のレーベル:ペリーコ・レコーズの第一弾。ときのスタイリッシュなサウンドで人気を得た。

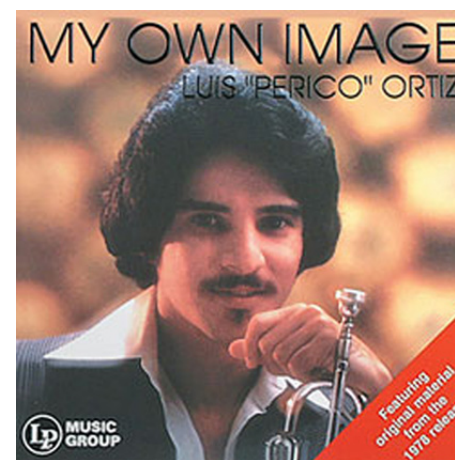
9. Bohemio



Fuego by Mongo Santamaria



ジョン・フォガティ?



Copyright: マンボラマTokyo



マンボラマTokyo presents 新宿ラテン地獄1 ～サルサ定番～



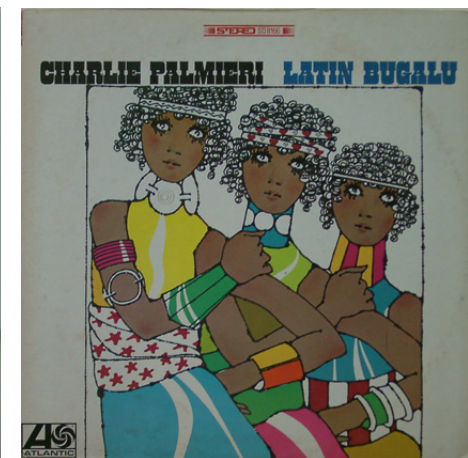
10. La Hija de Lola

チャーリー・パルミエーリ Charlie Palmieri

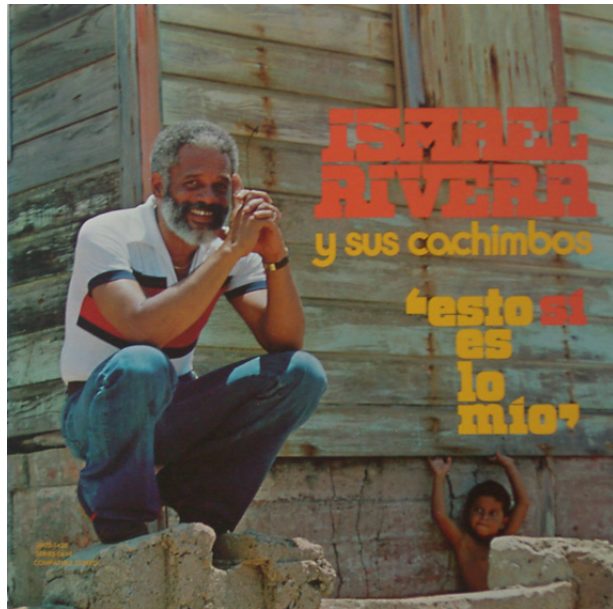
エル・ヒガンテ・デル・ブランカ・イ・ネグラ鍵盤の巨人。テイト・ロドリゲス、テイト・プエンテ、両オーケストラで腕利きピアニストとして活動し、1960年代初頭のパチャンガ～チャランガ・ブームでバンド・リーダーとしての活動を開始し、平行してアレグレ・オール・スターズの実質リーダーであったり、少しあとにはティコ～プエンテ楽団のA&Rとしても活動するなど、1960年代～70年代のNYラテンのプロ中のプロ。

ドウボネイやアレグレ・オール・スターズのファーストではパチェーコと息が合ったところを感じさせるが、その後の展開を追いかけると、どこかソリが合わなかったのかもしれない。チャランガで張り合い、デスカルガでも張り合う(※パチェーコ項参照)が、ブーガルーがあまり好きでなかったところは世代がそうさせるのか。

リッチー・レイ、エディ・パルミエーリと並ぶサルサ3大ピアニストと称されるが、ピアノ奏者としてのあり方はティピカリスト。16譜のタイム間は並ぶものなし。この切れ味が、ワヘーオにオルガンを用いたときの懸念を吹き飛ばす原動力。



マンボラマTokyo presents 新宿ラテン地獄1 ～サルサ定番～



11. Las Caras Lindas

イスマエル・リベラ Ismael Rivera

ラファエル・コルティーホ楽団の豪放磊落なヴォーカリストとして1950年代に名声を得る。ボンバにおける天性のノリは、エル・ソネーロ・マヨールに名にふさわしい。麻薬所持で逮捕されたときにコルティーホ楽団はラファエル・イティエールを中心としたバイラブレなバンドとして再編成された。一方、ムシヨからの復帰後のコルティーホ～イスマエルはまたもや一緒に音楽活動に復帰するが、プロデューサー：ジョー・ケインとの共同作業でヴォーカリストとしてのスタイルを一新した。「ラス・カラス・リンダス」は代表曲中の代表曲。



Quitate de la via Perico by Cortijo



Copyright: マンボラマTokyo



プエルトリコの怪人伝説